

## 再生への願い

慧日山高伝寺は佐賀藩祖である鍋島直茂の父、清房が今から四百五十年ほど前に建てた寺で、鍋島家の菩提寺である。

鍋島藩といえは武士の心得をまとめた「葉隠」で知られ「武士道といふは死ぬことと見つけ



位牌所

たり」の言葉はあまりにも有名である。もちろん化け猫騒動でも知られている。不謹慎ではあったが、高伝寺の門を潜る前は、

武士たちの悲劇やお家騒動などの所縁の品々が残されていないか、是非ともこの目で見てみたい、などと少々期待していた。

境内の総面積は約一万坪。広さだけではなく、その吸い込まれるような静けさの中で鳥のさえずりが心に染み入る。そして降り注ぐ陽の光が柔らかく、そこには悲劇もお家騒動も感じられなかった。

唯一名残として上げるとしたら、本堂裏側にある約千八百坪の御墓所である。旧藩主鍋島家と、かつてはその主君にあたった竜造寺家の、主だった墓のほとんどがここにある。数百基が並ぶ墓所は圧巻であるが、すべ



墓所

の怨念、自害、亡霊騒ぎや奇病、さらには竜造寺家の藩主奪還の執念の訴訟。こういつた一連の事件が後に、芝居や講談で取り上げられた有名な「佐賀化け猫騒動」へと発展していったのだ。

とは言うものの、鍋島、竜造寺両家の墓石が一緒の墓地に眠っている様を見ると、両家の怨念を、高伝寺が長い年月をかけて浄化させてくれたような気がした。

戦国時代から徳川時代、そして明治維新までの鍋島藩三十五万七千石の佐賀の歴史は、高伝

寺にあるといっても過言ではない。

さて、高伝寺では今大事業が始まっている。日本に二つしかない「大涅槃像」の三百年ぶりの全面修復である。

四月の釈迦堂御開扉法要（十九日、二十日の二日間）の時に限り一般公開されるこの涅槃像は、京都・東福寺にある明兆筆の模写で、縦十五・二メートル、横六メートルの巨大なもの。一目見てその大きさや、色彩の鮮やかさにびつくりさせられる。

お釈迦さまが息を引き取られ横たわっている姿を中心に、傍にはたくさん弟子や天女たち、さらに動物たちが嘆き



藩祖直茂肖像

てが最初からこの寺にあったのではなく、あちこちの寺に散らばっていたものを、最後の藩主鍋島直大が明治四年に集めたものである。東側が竜造寺墓地、西側が鍋島墓地とはつきり分かれている。

さてさてこのあたりが「化け猫騒動」の基本となるところだ。時代の流れとはいえ藩主が、隆盛を誇った竜造寺家から、その家臣の鍋島家に移った事情、そ

悲しんでいる情景が描かれている。しかし和紙のため、中央に裂け目が入るなどして傷みが激しく、修復が長年の課題だった。何とか早く修復したいという高伝寺の熱意が伝わり、ついに実行委員会が結成され、一般にも募金を呼びかけている。その費



本堂